

「冎」について

はじめに

「冎」という文字は単独で使われることはほとんどない。「骨」の上
部だというと、ああなるほどと気づくだろう。「骨」は「月||肉月||肉」
がついている骨であるため、実際には「冎」こそが、本当の「骨」と
いうことになる。

「冎」は『説文解字』では部首だが、『康熙字典』では部首ではない。
『康熙字典』では「骨」が部首とされている。「冎」自体は「冎部四」
という部首に分類されている。

『説文解字』巻五の部首としての「冎」には「𠂔刑」と「𠂔脾」
がおさめられる。

「冎」は、

剔人肉置其骨也。象形。頭隆骨也。凡冎之屬皆从冎（人の肉を剔
（けず）りて其の骨を置くなり。象形。頭隆骨なり。凡そ冎の屬、
皆な冎に从う）。

大形徹

とみえる。

ここで許慎は頭隆骨と称しているが、文字学の研究者には、その見
解に異をとなえるものもある。そのことについては後述する。

「刑」は、

分解也。从冎从刀。憑列切。（分解なり。冎に从い刀に从う。憑
列の切）。

「脾」は、

剔也。从冎卑聲、讀若罷。府移切。（剔（わか）つなり。冎に从
い卑聲。讀みて罷の若（ごと）し。府移の切）。

とされている。

「冎」の説明に「剔人肉」とみえる。「剔」は削るという意味だが、「冎」
の形には、その意味を見いだしがたい。これは「刑」の説明である「分
解也。从冎从刀」によって「冎」を説明したのである。「人肉」と

あるため、これは人である。また「頭隆骨」とあるため、頭骨なのでろう。白川静は「頭や胸の骨の形」^{〔1〕}と、頭骨だけでなく胸の骨と解釈している。これについても後述する。

部首としてはそうなるのだが、この文字を構成要素とするものは他にもある。それらには、精神や霊（タマシイ）的なものと結びつくものがある。つまり精神的なもの、一般に目に見えないと考えられているものを文字で表現しているのである。

たとえば「冎」に「口」がつくと、「冎」（説文冎、甲骨𠄎、その他𠄎^{〔2〕}）となり、さらに「示」がつくと「禍」（説文禍、甲骨𠄎^{〔3〕}、その他𠄎^{〔3〕}）となる。これは「わざわい」という意味になる。

六書という分類法がある。「象形・指事・会意・形声・転注・仮借」である。「冎」は「冎」と「口」の会意。「禍」は「示」と「冎」の形声であり、六書の中でこれらの文字の説明はつく。

「象形」という形を象（かたど）った文字という分類はある。白川静は、「象形」を「絵画的な方法」と述べ、『説文解字叙』の「象形なる者は、其の物を畫成し、體に隨つて詰諷（きつくつ）す。日月、是れなり」^{〔5〕}を引用している。

それでは形のないものについてはどうなのだろう。さきに述べたように精神や霊に関する文字は多くある。それらは形のないものである。形のあるものと、ないものという分類もまた可能ではないだろうか。

象形が形のあるものを示すとすれば、すでにその時点で実際には形のないものは分類されているはずである。象形以外のものという分類である。けれども、六書という分類には、そのような項目はない。項

目がないため、形のないものについては、これまで、ほとんど注目されることなかったように思われる。

拙稿では、そのような、形のないものに関する文字、そのなかでもとくに精神や霊に関する文字がどのような構造になっているのか、なぜそれがそうだとわかるのかといったことについて、「冎」という文字とその派生形の文字を例にとって、簡単に提示してみたい。

1、「冎」についての先行研究

「冎」についての先行研究には以下のものがあげられる。陳夢家「釋冎」（考古社刊 第五期）、郭沫若（『殷契粹編考釈』）、馬叙倫（『説文解字六書疏証』）、李孝定（『甲骨文字集釋』第四）、于省吾「釋冎」『甲骨文字釋林』、徐中舒『甲骨文字典』巻四、丁驥『東薇堂讀契記』中国文字新十二期がある。

それぞれの説明はかなり長い。そのため、ここでは拙稿の関心にある部分のみを摘録して紹介する。

著者	書名・論文名	内容(摘録)	備考
許慎	『説文解字』 巻五	人の肉を剔（けず）りて其の骨を置くなり。象形。頭隆骨なり。凡そ冎の屬、皆な冎に从う。	人の頭隆骨。これは頭蓋骨の上部をさすと思われるが、きちんとした説明はない。

郭沫若	陳夢家
『殷契粹編考 積』	「釋𠂔」考古 社刊 第五 期
<p>上の述ぶる所を總ぶるに、卜辭の𠂔は卜骨の形を象り、讀みて咎の若くす、故に同音假借して咎と為す。孳乳して過と為り禍と為り、義符の肉を加えて骨と為り肯と為り、又た孳乳して禍と為り鍋と為り、器の名と為る。</p> <p>：後ち骨白刻辭に「四₁出₁𠂔」の一例を得、林二・卅・一二。𠂔を釋して𠂔と為して謂えらく即ち骨窠と。𠂔は即ち此れ₂𠂔₂字の草率なる者、其の字、簡畧して之れを出だせば、則ち₃𠂔₃の諸形と為り、因りて疑うらくは、凡そ卜辭の「亡₄𠂔」の字、均しく是れ「亡₄𠂔」、讀みて、禍無きか、と為す、但だ苦だ確證無し。今、本片を得、此れ疑うらくは乃ち断然、證實なり。⁽⁸⁾</p>	<p>上の述ぶる所を總ぶるに、卜辭の𠂔は卜骨の形を象り、讀みて咎の若くす、故に同音假借して咎と為す。孳乳して過と為り禍と為り、義符の肉を加えて骨と為り肯と為り、又た孳乳して禍と為り鍋と為り、器の名と為る。</p>
<p>※骨窠。 𠂔 𠂔 𠂔</p>	<p>※卜骨の形。過・禍などになる。</p>

李孝定	馬叙倫
『甲骨文字集 釋』第四	『說文解字六 書疏証』
<p>饒炯曰く、𠂔は即ち骨の象形の 本字なり。形顯らかならざるに 因りて、乃ち肉を加えて以て之 れを箸（あきら）かにするなり。 唐蘭曰く、過伯殷の𠂔は即ち過 なり。走に従う。𠂔に従う。𠂔 は即ち𠂔なり。魚七₁𠂔₁字の従う 所の₂𠂔₂は即ち骨の字。卜辭之₃𠂔₃ は即ち𠂔の字。倫按ずるに饒・ 唐の二説、是なり。初文の骨の字、 象形、₄𠂔₄に作るに本づく。此れ 上の₅𠂔₅、骨の端₆𠂔₆處に象るな り。金甲文は則₇𠂔₇、兩端の₈𠂔₈ に象るなり。說解本、骨に作る なり。今を以て古を釋す。校者 知らざれば、則ち人肉を別り其 の骨を置くを以て之れを説く。 後世、剛刑有る自りの外、寧ん ぞ此の忍き事有らんや。頭隆骨 也も亦た校語なり。⁽⁹⁾</p>	<p>饒炯曰く、𠂔は即ち骨の象形の 本字なり。形顯らかならざるに 因りて、乃ち肉を加えて以て之 れを箸（あきら）かにするなり。 唐蘭曰く、過伯殷の𠂔は即ち過 なり。走に従う。𠂔に従う。𠂔 は即ち𠂔なり。魚七₁𠂔₁字の従う 所の₂𠂔₂は即ち骨の字。卜辭之₃𠂔₃ は即ち𠂔の字。倫按ずるに饒・ 唐の二説、是なり。初文の骨の字、 象形、₄𠂔₄に作るに本づく。此れ 上の₅𠂔₅、骨の端₆𠂔₆處に象るな り。金甲文は則₇𠂔₇、兩端の₈𠂔₈ に象るなり。說解本、骨に作る なり。今を以て古を釋す。校者 知らざれば、則ち人肉を別り其 の骨を置くを以て之れを説く。 後世、剛刑有る自りの外、寧ん ぞ此の忍き事有らんや。頭隆骨 也も亦た校語なり。⁽⁹⁾</p>
<p>※𠂔には 「禍」と解 積できる場 合と「占」 と解釈でき る場合があ る。</p>	<p>※骨の象形 の本字。</p>

于省吾	「釋𠂔」『甲 骨文字釋 林』
<p>之れを總ぶるに、前文既に𠂔の骨字の初文、骨架相い支撐うるの形を象り、其の左右の小さき豎劃は骨節轉折の處、突出する形を象り、後來、𠂔の字、孳乳して骨と為り、遂に肉に从い𠂔聲の形聲字と成爲るを闡明せり。これ就ち説文の誤解を糾正せり。商代金文中の舊と識らざる所の𠂔字、古文字、横列豎列往往にして別無きを以て之れを證するに至りては、疑い無く、它もまた是れ𠂔字の古文なり。古文字中の𠂔と𠂔に从うの字、既然に常見すれば、則ち甲骨文の𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔等の字、舊と釋して禍𠂔或いは骨と爲し、又た述或いは𠂔を釋して過と爲すは、都て是れ主觀臆測、毫も根據無きものなり。</p>	
<p>※（人の）骨架が支える形、左右の小さな縦画は関節。※禍、𠂔、骨などとすゝるのは主觀臆測。</p>	

丁驥	徐中舒
『東薇堂說契記』中國文字新十二期	『甲骨文字典』卷四、
<p>：此れ牛胛骨轉倒の形なり。此の字の隸は𠂔、實に骨の形なり。</p>	<p>〔解字〕𠂔はト用の牛の肩胛骨の形を象る、即ち《説文》𠂔字の初形、上部の𠂔、骨臼之下凹を象り、下部の𠂔は牛の肩胛骨の上歛まり下侈きの形を象る、又たト骨整治せし時、骨臼の一侧に於いて、鋸もて一直角形の骨塊を去る、故に復た骨版上部骨臼の旁に於いて特別にし形の缺口を描繪して𠂔形を作る。甲骨文の𠂔或いは又た𠂔に作るは、乃ち𠂔の形の簡化に由りて𠂔と為り、進みて簡化して𠂔、𠂔の形と爲る。</p> <p>一、用て骨に作る（例文 省略） 二、讀みて禍の如し（例文 省略） 三、人名（例文 省略）</p>
<p>※牛の肩胛骨をひっくりかえした形。</p>	<p>※占いに用いる牛の肩胛骨。鋸で整形した形。</p>

劉志基	『中国漢字文物大系』 文字の写真	甲骨文は骨架の形に象る、当に“骨”字の初文と為すべし。後世“𠂔”字罕に見ゆるは、當に“骨”の字、已に有るに因るが故なり。	(人の)骨架の形。𠂔版をみれば、頭骨ではない。
白川静	『字通』 ※𠂔の甲骨・金文の例はあげていない。 ※𠂔については甲骨・金文俱	「象形」頭や胸の骨の形。「説文」四下に「人の肉を剔りて其の骨を置くなり。象形。頭隆骨なり」という。「列子、湯問」に炎人の国の話として、親が死ぬと「其の肉を𠂔りて之れを棄つ」とあり、複葬の俗をいう。卜辞に「犬を𠂔らんか」のように、犬牲の法を卜するものがある。𠂔に祝禱の器である𠂔を加えたものは𠂔。禍(禍)の初文である。 〔訓義〕 1. わける、けずる、とく。 2. わざわい。	※人の頭隆骨。 ※𠂔は複葬で肉をけずること。

説はさまざまである。大きく分けると①人骨 ②獣骨に分かれる。①人骨はさらに、a頭隆骨 b骨架に分かれる。②獣骨は牛の肩胛骨である。それを簡単な表にすると以下のようになる。

骨	部位		学者
人骨	頭隆骨	骨架	許慎・白川静 于省吾・劉志基
獣骨	牛の肩胛骨	陳夢家・郭沫若・馬叙倫・徐中舒・丁驥	





『説文解字』は頭隆骨だという。この言い方は、『説文解字』に始まるもので、その後の文献も、これを踏襲したものしかあらわれない。医学的には「外後頭隆起」のことかもしれない。また第七頸椎のことを「隆椎」という。この部分だけが隆起しているからである。けれどもそれに相当するかどうかは不明である。

于省吾や劉志基のあげるものは人の骨架の形だとする。要するに骨と骨がつながる様子だという。于省吾は関節にあたる部分まで指摘している。この場合、頭骨ではなく身体の骨であろう。ただし、手足あるいは肋骨などに特定できるかという点、どうもそのようでもない。白川静の『字通』は、この形と他の形をともに「𠂔」としてあげている。しかし、この形の説明はない。白川静は親が死んだときに肉を削り取る習俗をあげる。人骨を祖先のものともみなすようである。

一方、獣骨の方は、牛の肩胛骨とみなしているようである。骨臼部分やノコギリで切り取って整治しているという。牛の肩胛骨は占いに使用されるために、この解釈は占いの内容と関連することになる。人骨で占う例はあり、とくに頭骨で占った例はあるものの、それは特殊な例であり、一般的なものとはいえない。

二、「死」という文字について²¹

「死」という文字は「冎」と関連する。「死」の文字の部首である「歹(冎)」は『説文解字』四下に、「列骨の残なり。半冎に从う」とされる。つまり、「歹(冎)」は、「半冎」すなわち「冎」の半分ということになり、残骨ということになる。




そこで「死」の甲骨文の形をみてみると、甲骨文として「・」²²、金文として「・」などがあげられている。²³
 「歹(冎)」は人が残骨に拝礼している様子である。残骨をあらわす部分の上部は「卜」にもみえるが、これを「卜」とみなすものはない。もし「卜」だとすれば骨と占卜の関係を考察する上のヒントになるかもしれない。

徐仲舒『甲骨文字典』は「死(冎)」について、

人、朽骨の旁に拝するを象り、以て死の義に會す²⁴。

とする。

朽ちた骨つまり骨を拜んでいる様子である。他の字形をみても

「」²⁵は傍らの人が側身形で立っている様子で、「」²⁶は尸のよう
 うにみえ、また「」²⁷は跪いているようにみえる。これらの残骨は当然、人骨であろう。

白川静『字通』「死」は「冎」は人の残骨の象。人はその残骨を拜し
 申う人²⁸と説明する。徐仲舒にはなかった「申う」の語が入っている。


「骨」に死者の靈魂が憑りついていなければ、骨を拜し申う意味はないだろう。甲骨文の時代には、骨と靈魂が一体のものと考えられていたことがわかる。

『莊子』至樂の「莊子、楚に之きて、空髑髏を見る。：髑髏を援きて枕して臥す。夜半、髑髏、夢に見われて曰く、「子の談すること辯士の似し。」」²⁹は、路傍に転がる頭蓋骨を枕に眠ったため、夢に死者(髑髏)の魂が現れたという話である。これは死者が骨になったあとも、その靈魂がよりつくという話である。その淵源が殷の時代からあったということがわかる。

三、冎・禍・過

「冎」の下に「冎」のついたものが「冎」である。「冎」は白川静は「さい」と説明する。徐仲舒は「人所以言食也、象形(人の言い食らう所以なり、象形)」と「口」という理解だが、口以外に「人名・災禍」という意味があるとしている。

冎

白川静は、「冎」について、「字訓」「わざわざい」としている。文字としては、甲骨「」³⁰としている。これは「冎」と同じである。

「会意」として、

冎(か) + 口。冎は人の上体の残骨の象。口は冎(さい)、祝禱
 を取める器の形。その死霊の呪能によって、人に呪詛する意で、

これによって禍殃を与える。「説文」二上に「口戻りて正しからざるなり」とあり、禍(禍)の初文

とみえる。

なぜ残骨で呪詛が行えるのかについては、骨と靈魂の関係をベースにすればわかりやすいであろう。また「𠂔」は「禍」の初文としている。「禍」は「わざわい」である。

禍

「禍」については、「字訓」「わざわい・とがめ」とした上で、甲骨として「慌」、金文としては「抗」をあげる。

そして、

【形声】 声符は𠂔(か)。𠂔は残骨を用いて呪詛を行う意。それによってもたらされるものを禍という。「説文」一上に「害なり」、「積名、積言語」に「毀なり」という。毀も残骨を毀(う)って呪詛する意。字はまた既を作る。

という。

『釋名』の原文は、漢劉熙撰『釋名』卷四、釋言語「禍は毀なり。毀ち滅するを言うなり」⁽³⁰⁾である。ここでは「毀なり」というとした上で、「毀も残骨を毀(う)って呪詛する意。字はまた既を作る」と述べる。

あわせて、「毀」について白川静の『字通』を考察すると、

【会意】 皇+𠂔(しゆ)。皇は「説文」古文の字形によると白(きゆう)と王(てい)の形。すなわち兒(児)が挺して立つ形。これに𠂔を加えて毀(う)つ意の字である。「説文」に字を土部十三下に属し、「缺くなり」と訓して、土器の類を毀損する意とするが、その字形は𠂔(のう)の縫合部のある幼児を毀損する意で、おそらく犠牲の方法を示す字であろう。殷墓の殉葬者のうち、多数の幼童、未成年者の残骨がある。「周礼、地官、牧人」「凡そ外祭毀事には、彪(むくいぬ)を用ふるも可なり」の「杜子春注」に、「毀とは副宰候禋、殃咎を毀除するの屬を謂ふ」とあって、犠牲を用いる祓禋の儀礼であるが、毀では異族の幼孩のものを用いることがあったのであろう。毀はまさにその字であり、また焚殺することを燬といったものと思われる。

とある。

『周禮』の杜子春の注にある「毀とは副宰候禋、殃咎を毀除するの屬を謂ふ」⁽³¹⁾は、本来、犠牲を用いる祓禋の儀礼である。それを「殷墓の殉葬者のうちに、多数の幼童、未成年者の残骨がある」ことから、「毀では異族の幼孩のものを用いることがあったのであろう」とする。白骨に対するものとしては、白川静は「敷」の例をあげている。「放は架屍を毀(う)つ形。その架屍に頭の存する形が敷であるから、屍に支を加える形である。放は架屍を毀(う)つ追放の儀礼。その呪霊

を向して呪詛する行為をいう」としている。
いずれも人の骨に関わる文字であるといえる。

過

「字訓」すぎる・よぎる・あやまち」とする。甲骨の字形はなく、
金文「𠄎・𠄏」の形をあげる。

「形声」声符は冎(か)。「説文」二下に「度(わた)るなり」と
度越・通過の意とする。冎は残骨の上半に、祝祷を収める器(口、
𠄎(さい))の形を加え、呪詛を加える呪儀。特定の要所を通過
するとき、そのような祓いの儀礼をしたのであろう。

とする。

「冎は残骨の上半に、祝祷を収める器(口、𠄎(さい))の形を加え、
呪詛を加える呪儀」という。ここもまた呪詛という解釈であり、また
残骨である。

この「過」には、「参考」とあり、

春秋期の金文「𠄎(ちゅ) 大宰鐘」に「用(もつ)て眉壽(めいじう)を過
(い)る」という用法がある。金文に多く見える「𠄎(い)る」
も人骨の呪霊を用いる呪儀。国語の「すぐ」は「すがし」と同根
の語と思われ、修祓によって心の清まる意。「あやまち」は「霊(あ
や)」のはたらきをいい、呪儀による禍殃を意味する。

とみえる。

ここも人骨と関わる。また「あやまち」は、日本語として、「霊(あ
や)」と関連するといいい、呪儀による禍殃を意味するという。

さらに𠄎について、考察すれば、

「会意」𠄎(ほう) + 𠄎(亡)。ともに人骨の象。これを呪霊とし
て祈り求める意。

とみえる。

ここもまた人骨に関連している。

おわりに

拙稿では「冎」という文字とその派生形の文字を例にとって、形
のないものに関する文字、とくに精神や霊に関する文字がどのような構
造になっているのかを考察した。一では「冎」についての先行研究を
整理した。諸説紛糾しているが、人骨とみる場合、獣骨とみる場合に
大きく分かれた。人骨の場合は、頭か身体の骨格かに分かれる。獣骨
は牛の肩胛骨である。大きくみれば「骨」である。人骨であれば、そ
こに死者の霊魂が憑りつくという概念がベースとして存在している事
に気づく。牛の肩胛骨であってもそれは占卜用であり、そこに神ある
いは祖霊の意思があらわれるということが前提となっているおもわれ
る。いずれもたんなる物質としての骨ではないだろう。

二では「死」という文字について考察した。「死」という文字の「歹」の部分は「半冎」とされる。残骨だという。その横には側身形の「人」が配され、跪坐しているものもある。人が残骨に拝礼している様子にみえる。「歹」の上部には、占卜の「卜」にみえる形が描かれているが、それを占卜の卜だとする説明はない。しかし、「半冎」の上には「卜」が配され、「冎」の下には「口」が配されて「冎」となるとも考えられる。「卜」と「口」は「占」の構成要素であり、いずれも占卜に関連するとみることできるかもしれない。

三では冎・禍・過などの冎から孳乳、つまり派生してあらわれる文字について考察した。「冎」は『説文解字』の部首であるが、そこにおさめられる文字は³⁴⁾冎の二つのみである。冎・禍・過はいずれも別の部首である。複数の部首に重複して分類するという考え方はない。冎・禍・過などは「冎」の部首には分類されないため、文字の流れを考察する場合は孳乳の概念をもちいることが有効であろう。白川静は、「冎」を「わざわい」、「禍」を「わざわい・とがめ」、「過」を「あやまち」と訓じている。またその説明に「冎は残骨の上半に、祝禱を収める器（口、冎さい）の形を加え、呪詛を加える祝儀」と述べている。ここで「残骨」という「骨」に関わって「呪」という概念が展開されていることに気づく。「骨」には、たんなる物質ではなく、そこに死者の靈魂がよりつく。その前提のもとで、呪詛が行われるということになる。文字の構造としてみた場合、「冎」は、骨の象形の「冎」に器あるいは口の象形の「冎さい」あるいは「口」の組み合わせである。「禍」ではさらに「示」がつき、「過」では「辵」(しんにょう)

がつく。「示」は「神を祭る祭卓³⁵⁾」というテーブルであり、象形である。「辵」は、「会意」イ(てき) + 止(し)。イは小径、止は趾(あし)、歩行する意³⁶⁾と会意であるが、その構成要素「イ(てき)」「止(し)」まで分解すると象形となる。ただし、これはいずれの漢字においてもそうであろう。

ここでとりあげた「わざわい・とがめ・あやまち」などの形のない文字も構成要素を細かく分解すれば、それぞれが象形文字ということになる。つまり、形のないものを意味する文字も、形のあるもの組み合わせで作ることができるのである。

しかしながら、今回とりあげた「わざわい・とがめ・あやまち」と読める文字のもとには、「冎」という文字があり、それは「骨」である。上述したようにその解釈は人骨と獣骨に分かれる。しかし、いずれにしても、そこに靈魂が憑りつくことによって宗教的な意味が生じるという確たる認識がある。換言すれば、文字以前に靈魂が憑りつくという認識がなければ、そのような文字は作られるはずもないということである。その認識のもとで、象形と象形の組み合わせによって、つまり、形のあるもの同士を組み合わせる事によって、形のないもの文字を生み出しているといえるのである。

注

(1) 『字通』、平凡社、一九八九、一〇九頁。甲骨文などの字体はCD-ROM版より(以下同じ)。

(2) 同右。

(3) 同、一一七頁。

- (4) 白川静『字通』は、「文字の構造法。象形・指事・会意・形声・転注・仮借。宋・戴侗「六書故の序」書多しと雖も、其の實を蓬(す)ぶるは六書のみ。六書既に答じ、参伍して以て變じ、觸類(しよくるい)して長ず」と述べる。※元、蘇天爵編『元文類』卷三十二、序に「六書故序 戴侗：書雖多、總其實六書而已。六書既通、参伍以變、觸類而長」とみえる。
- (5) 白川静『字通』象形の説明。なおこの部分の原文は漢許慎撰『說文解字』卷十五上に「象形者畫成其物隨體詁訓日月是也」。
- (6) 別人肉置其骨也。象形。頭隆骨也。凡𠂔之屬皆从𠂔。
- (7) 總上所置其骨也。卜辭之𠂔象卜骨之形、讀若咎、故同音假借為咎。孛乳為過為禍、加義符肉為骨為骨、又孛乳為禍為禍、為器名。
- (8) …後于骨白刻辭得「𠂔」之一例、林二・卅・一二。釋𠂔為𠂔謂即骨葉。𠂔即此𠂔字之草率者、其字簡畧出之則為𠂔諸形、因疑凡卜辭「亡𠂔」字均是「亡𠂔」、讀為無禍、但苦無確證。今得本片、此疑乃斷然證實矣。
- (9) 饒炯曰、𠂔即骨之象形本字。因形不顯、乃加肉以審之也。唐蘭曰、過伯毀之𠂔即過也。從𠂔。從𠂔。𠂔即𠂔也。魚匕𠂔字所從之𠂔即骨字。卜辭之𠂔即𠂔字。倫按饒唐二說是也。初文骨字本象形作𠂔。此上之𠂔象骨之𠂔也。金甲文則「𠂔象兩端之𠂔」也。說解本作骨也。以今釋古。校者不知、則以別人肉置其骨說之。自後世有剗刑外寧有此忍事乎。頭隆骨也亦校語。
- (10) 綜之、卜辭諸𠂔字、釋為𠂔骨、讀為禍。於諸辭均可通。讀至固𠂔二字、則為从𠂔之字、當釋占。若𠂔與𠂔、非一字也。
- (11) 總之、前文既闡明了𠂔為骨字的初文、象骨架相支撐形、其左右小豎劃象骨節轉折處突出形、後來𠂔字孛乳為骨、遂成為从肉𠂔聲的形聲字、這就糾正了說文的誤解。至于商代金文中舊所不識的𠂔字、以古文字橫列豎列往往無別證之、無疑它也是𠂔字的古文。古文字中𠂔和从𠂔的字既然常見、則甲骨文應的𠂔、𠂔等字、舊釋為禍、𠂔或骨、又釋通或逕為過、都是主觀臆測、毫無根據的。
- (12) 「𠂔」は「𠂔」とは別字である。しかし、こゝは「𠂔」の意味で「𠂔」を使っているのとらえた。『字彙』醒誤に「𠂔、聚斂収斂 从文、今誤作𠂔、斂、音酣、欲也、从欠」とみえる。
- (13) 「解字」象ト用之牛肩胛骨形、即《說文》𠂔字初形、上部之𠂔象骨白之下凹、下部之𠂔象牛肩胛骨上斂下修之形、又ト骨整治時於骨白一側鋸去一直角形之骨塊、故復於骨版上部骨白旁特別描繪L形之缺口而作𠂔形。甲骨文𠂔或又作𠂔、乃由𠂔形簡化為𠂔、進而簡化為𠂔形。

- 二、読如禍(例文 省略)
- 三、人名(例文 省略)
- (14) …此牛肩胛骨轉倒之形也。此字隸𠂔、實骨之形也。
- (15) 白川静、平凡社、一九九六、一〇五頁。
- (16) 四庫全書の『列子』は「楚之南、有炎(去聲、本作談音朽)人之國、其親戚死、朽其肉而棄、然後埋其骨、廼成爲孝」となっている。アンダーラインの部分で白川静の引用した部分。ここでは、「𠂔」ではなく「朽」となっている。「朽」だと朽ちる意味となり、肉を腐らせて骨だけにするといことで、やはり白川静のいう複葬の意味となる。この部分、「墨子」卷六、節葬下は「其親戚死朽其肉而棄之。『太平御覽』四夷部十一、南蠻六、炎人國、『博物志』曰…其親戚死、劓肉、死棄之。『太平廣記』蠻夷一、軋沐國、其親戚死、劓其肉而棄之。」「朽」と「劓(けず)る」の二種に分かれる。宋、祝穆撰『古今事文類聚』前集卷五十六、喪事部、「其親戚死𠂔(音寡)其肉而棄之」にみえるものが「𠂔」である。(要確認)。
- (17) 前掲『字通』、一〇五頁。
- (18) 劉志基主編、大象出版社二〇一三年、四七六頁。
- (19) 甲骨文象骨架之形、當為「骨」字初文。後世「𠂔」字罕見、當因「骨」字已有故。
- (20) 李科「殷墟八頭坑髑髏與人頭骨刻辭」(『中國語文研究』一九八六年、八期)、荒木日呂子「東京国立博物館保管の甲骨片について—人頭骨刻字についての考察」(MUSEUM 東京国立博物館美術誌、一九九三年)を参照。
- (21) 拙稿「死についての文字学的考察…魂と骨の観点から」(人文学論集、2003、21、p.51-66)で詳しく論じた。ここでは、その内容を簡略に紹介したが、考察の角度を変えている。
- (22) 削骨之殘也。从半尙。
- (23) 前掲『字通』六四二頁「死」に掲げられたもの。
- (24) 徐仲舒、一九八八年、四川辞書出版社、四六三頁。象人扞於朽骨之旁以會死義。
- (25) 一期。『小屯·殷墟甲骨文字甲編』甲一一六五。
- (26) 一期。『小屯·殷墟甲骨文字乙編』乙一〇五。
- (27) 一期。『殷墟書契前編』前五・四一・三。
- (28) 前掲『字通』六四二頁。
- (29) 「莊子」外篇 至樂第十八「莊子之楚、見空髑髏、…援髑髏枕而卧、夜半髑髏見夢曰、子之談者、似辯士…」。
- (30) 禍毀也。言毀滅也。

- (31) 毀謂黷候禳毀除殃咎之屬
(32) 前掲『字通』三三〇頁。
(33) 前掲『字通』六七七頁。
(34) 前掲『字通』一〇八五頁。

(大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科教授・
立命館大学衣笠総合研究機構客員教授)

